= 5
2533

二 5
2533

須弥山の圖ハ間〻大雜書ニ世相をぐり俗書ハ出ぶ元来
意義深遠なりの也唯深秘又多の人の深と改正し逐一平仮名ニ郷し分別しがたきの分別園と定
て委〻詳と見て漢ハ如来説法天文と弗人天地海山日月
星辰の行道大小方量里数月輪盈缺まで立地小器明もべ
釋尊乃意ろ出るなれハ廣大の意味あるのなり

新刻 須弥山圖解 完

高蘭山先生著

東都書肆 星運堂梓

序

秋夜菊除を終者ハ古窓ハ燈を掛て古机閑に凭ら時ハ
士特寺遊者一小冊を懐て来て余に序
せんことを請余閑て因見ハ寺の事ハ
記せる書多ハ寺ハ茶毘ハ此
ものを釋氏ハ天学ハ所謂須弥山ハ
因解述者ハ名ハ蘭山先生なるう

K 5/(1)

先生姓ハ高井名伴寛字恩明蘭
山ハ其号也初冠より書を読み好を
博く内外二典に渉り天文暦数
術に精く後西洋諸蕃に学ぶ暨べて
暇日童蒙に教ふ回て生を述器界安
立に方り日行月数を詳に及び
仏を踏け誤を正し且仏法宝船に
あらずと雖も全く蒙昧を便ず

因て予愚孫山名三尺に書を求めて
を知しめんと説芸法として所を
生ずる童素伍めを然るなり細
林に徒と云ふ物を探索する人少
先生の性を拾ふ実に勤むるとして是
巳幼なる便有を為なるを学ぶを益
者を学ぶ浅なる人や頃日これを先生に請て
梓に上せ先生を元君幸に是を序せと

以余固より菲才浅学にして、知ること不なり。何ぞ敢て
[illegible]止まざるを恐れて、
[illegible]所を叙して、卷首に冠す。
[illegible]時文化六年秋

東屏　冨家恭識

冨家蔵書

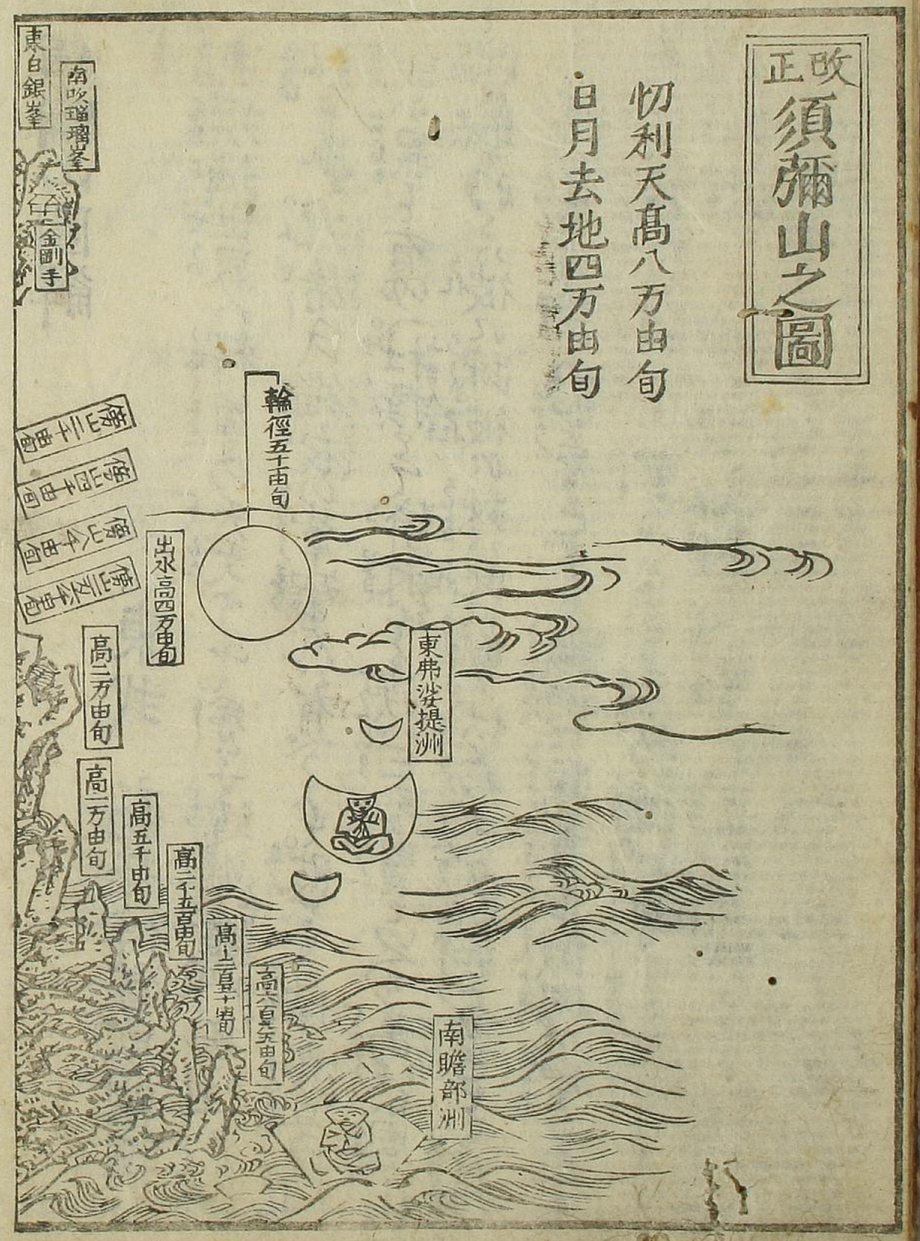
須彌山圖解

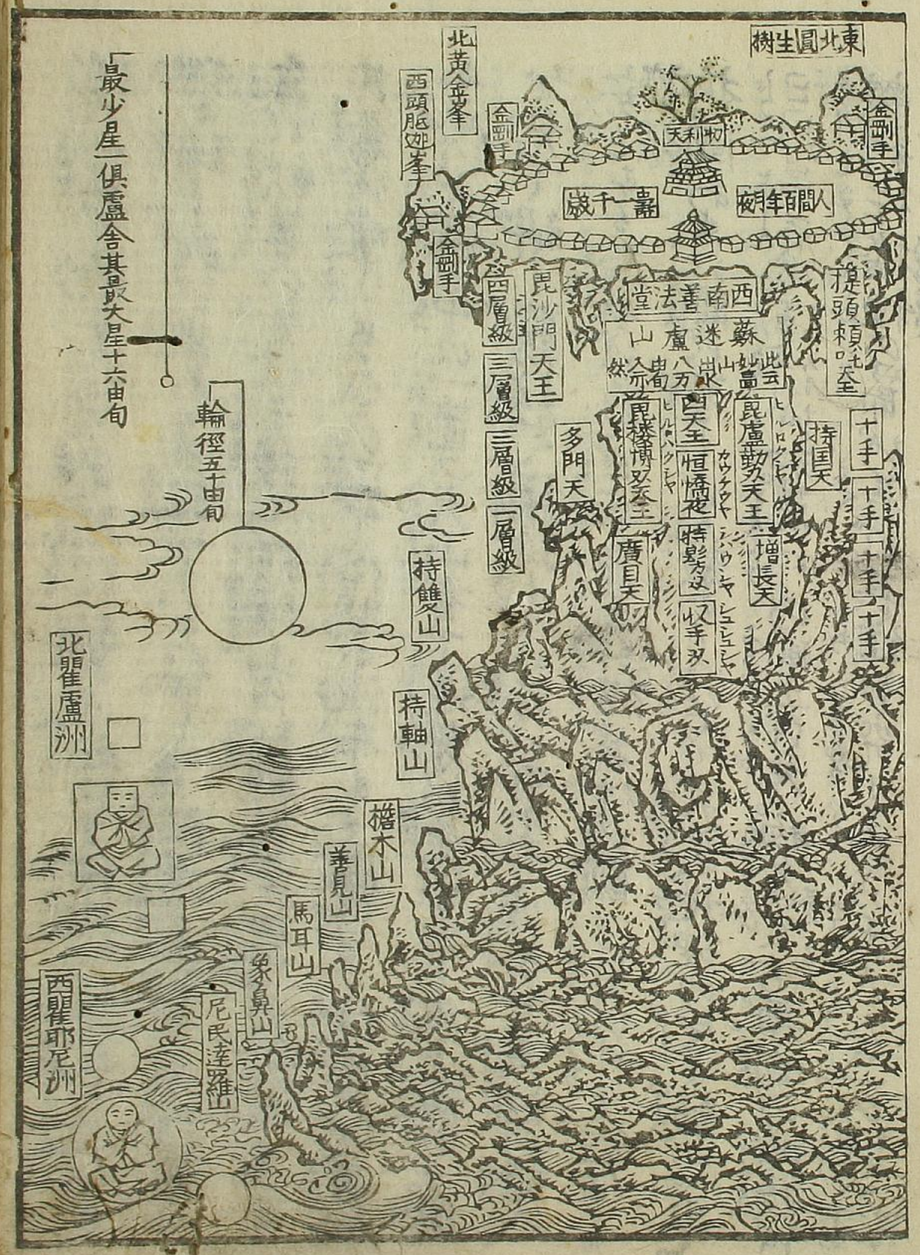
東武　高井伴寛思明述

夫須彌世界は釋尊の天文なり。帝釋達婆羅門等往々に説
ける處に浮屠氏緇衣の輩知ること有べし。然ども日域震旦の所
説に異なる有ゆえ。士擇て弁ずる族は曰聖賢といえ萬法に周うし。
此に聖なるは彼に疎く彼に疎は此に賢し。伏羲天文の聖なるとても百
に疎し。神農百草の聖なるとても鍼術に疎し。黄帝鍼術の聖なるも
世法に疎し。仲尼世法の聖なるとても生死に疎し。釈尊生死の聖なるも
天文に疎し。又梅定九が暦筭全書にも。蓋天周髀の学の術は周髀
小出もこれ其書全く佛氏宣夜学所天論等天論
かど皆支那の附会なり。西土の國々に流伝。是れ

改正 須彌山之圖

忉利天高八万由旬
日月去地四万由旬





得か全わり飲くるなり。是は治に精わり粗のみ。須弥の説此に根けれ。
理か通ず紐れ處わる論ぜり。されども愚聊考るれわり。今僧家の
爲に釈尊の意は主張し。須彌山の和解、は筆。世俗の説輩までも
其意は暁了しあんとし。因て俗間か流布する圖に少く改正は加。最初
か示し大海の中に一箇の大山有て。蓬萊に等しとのと思ふ族わり。圖
を見て解し紐れ故に須弥山とハ外に有かわるべ。今日萬國の諸人
安土桃山の世界は云へ。日本唐土天竺度。其他の國々皆此中と知る。
抑國わるべ。國に應じ教わり法わり。天文地理の學も教の一ぶ。
日月星辰の運行は知。萬邦の風土は考。物々榮枯顕晦の時候は
辨耕作播種の節は差べ。其道は究か至て。天人合一の理か洞

達しさるべ世学儒家佛説本邦夫々の天文わり。先儒家の天文
とハ。支那の説。伏羲作て天の文を觀。俯て地の理は察とそ。
黄帝岐伯以下聖賢の發明。漢の劉洪宋の何承天元の郭守敬の
名家追々精微は竭。清に弘暦の帝わり。今其道行る佛氏の天
文とハ。天竺にて釈迦の立らし。須彌山と其説倶舎論世間品に
委し。本邦神道の天文ハ國初より傳。聖德太子安倍清明等
の博識。熊沢蕃山は得。殊域の天文まぐ、兼用まとの。博く他の美
は容て我美は增。人我各別の見るは日本の風義。故に貞享暦
以前。唐土の暦法は用ら。又ハ須弥山の圖は製造。日月は懸て
運旋の理は明る儲にせられ。古紀に出るべ今渾天儀は扱

似たるものゝ須弥の絶頂は極楽界とする故其後佛家の荘厳も（此形象は撰一須弥檀の名今は略する）其餘の外
國夫々の天文學わきまへ。都て天は軍圓ゆゑ。雞子白の如く外を覆
地も亦圓るゝと。鷄卵黄の如く適中にわり。天は旋て憩び。地は靜て動
ずと説く。大槩変ずと。罕に地動の説わゝども。實理に背取用ゐ
扨儒家の天号ふ云れ。天の形象は一箇の西瓜は仮く譬喩ふ花蕾の
流に南極わきまへ。蔓は断る蔕の如く北極わり。二箇に作る事人。危下
は下さんとする如赤道。是ゝ南北二極の外を九十度余づ。其内
双方二十三度半づゝの間は。毎日日輪道は異ふして運旋。終に至る
南の端は旋復全く北の端に來。「春分」と「秋分」ふ赤道の下は行都て
目道は黄道と名く。日行毎日道は異ふ。晝夜長短わり。寒

山王日
神典仏利天
此天四ヶ各八
中央帝釈共
二十二

暑は氣の氣候粤に起るものゝ。日本唐土天竺は北極は北。南
極地下は沉で見ざる國土。ふは斜釈尊此四ふ北極は
世界の巔と。日月山の腰は運行。山の周囲は背面に依て晝夜は
と説。乾坤の間は惣括て須弥山と號。其絶頂は忉利天と称
の峯わり。峯毎は天坐。四八三十二の中央ふ帝釈天坐
合て三十三天と称。天上世界是ゝ天上は極楽界。地獄は地獄と
て教る爲に。廣大の佛智は説て其説は設る。凡愚の賢べき
の。南北二極は碓磨の臍の如く。其處ふ在て旋。相對して天の
樞とるものゝ。地は形象毬子の如く。其四ふ就て萬國り並。北極
三十六度高くゝ。南極は三十六度地下は沉る。若北極は

見て九十度なるべし。則頭上にあり。南極は足下の天かわり。かゝる國
古は日月横に旋。地上ふるる間は半年長に昼。地下に沉る間は
又半年長に夜。日の運旋遠く。極寒の地也。夜は氷海と云海の域
水まで氷ふ冱ると。是儒家の天学ふ元。今須弥山北極球頭上也
那。日月横ふ運にその是に相似り。唯地球の説ふ元旦
ゐるゞ如。梅匂菴氷ふる行スへ
俱舎論須疏ふ諸の有情の業。増上力ふて撮下して新て。虚空に後止
して風海はぜるとあり。廣さ無數厚さ十六踰繕那也旦と云高
岩又諸の有情の業増上力ふて大雲雨ふ起。風海の上ふ漬
漬車軸の如。積る水輪とゐる。未凝結ざるゞ深さ十一億二万踰繕

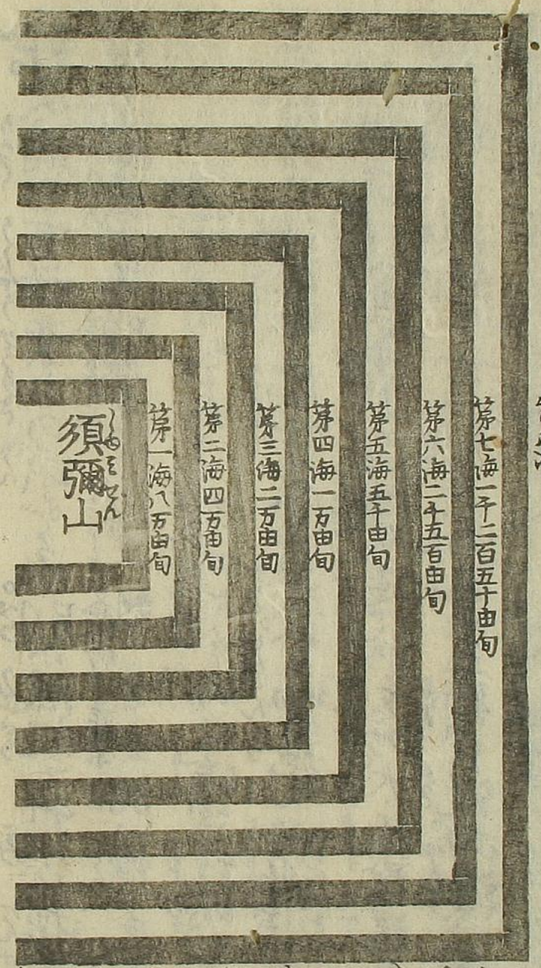
扇云旬佛經限量也
西域記数量之称踰繕那者
舊曰由旬

四

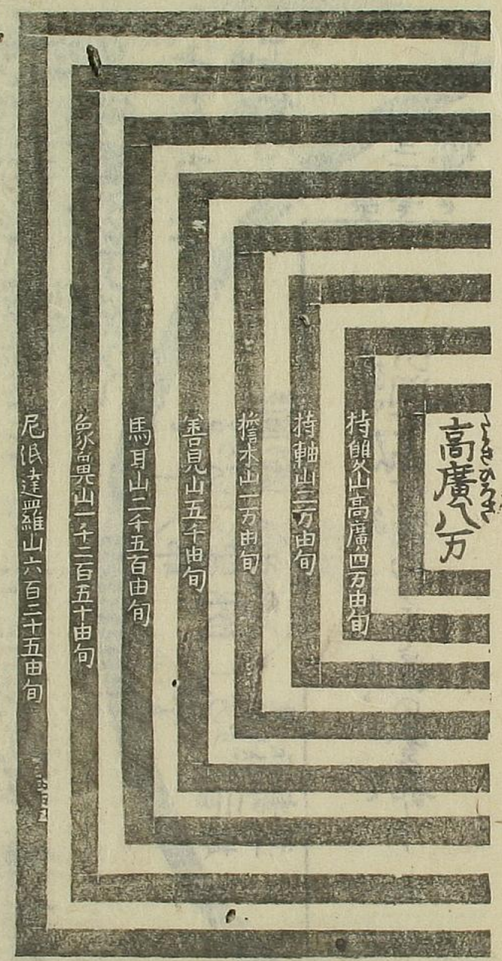
那。諸の有情業力の感ぜる。別ふ風起て水ふ搏擊。結て金
ゐる。水輪減て唯厚さ。又落汁ふ作業ふ翻て十方ふ流。海ハ轉て金輪とゐる。
厚さ三億二萬へとあり。是水風金の三輪ふ元明ふ
ふ世界の海。風輪の地上ふ天ふの間。金輪ハ地
なり。神道儒家の書ふも。開闢造化の云姿。太極陰陽五行の理球
事に託く演説と有に。震旦ふ五行ふ流。印度ハ四大と云。
佛説ふ須弥九山八海四大洲と云。金輪地の上に九の大山あり。妙
高山王ハ中に。妙高ハ蘇迷盧ふ訳。海の八ハ周帀して妙高山
ふ繞。其中七の小ふ内。其外に大洲四箇あり。又其外に鉄輪圍山
あり。圍帀て海の如。一世界ふ包容。禅家の円相妙高山ハ水ふ入

八萬。些とも亦同じ。海のハハ半ばに下り。そるぼと四方。廣さと四方。其次ハ又半ばに下り二万。海〻如斯。其九山の間に〻海わり。廣狹内外へ半に減ずる和て左の圖の如し

第八海



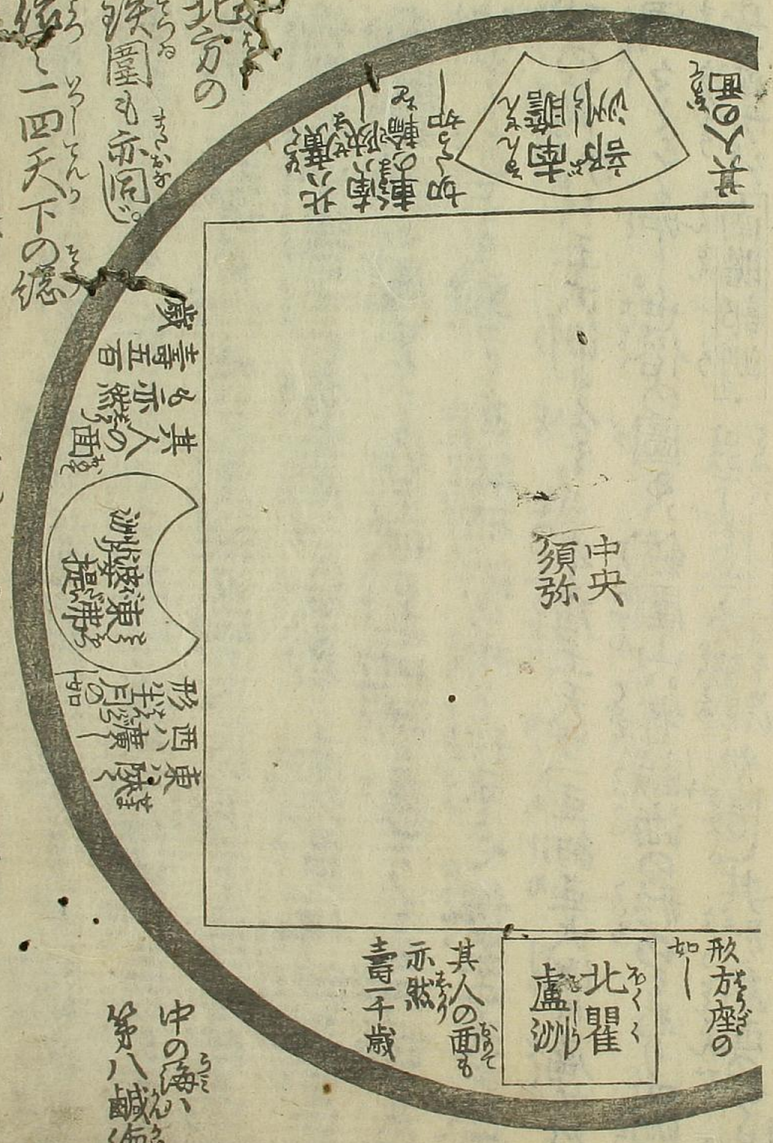
九山の高下七海の廣狹分量くわしき。如斯図画に其實形状摸様。殊に世俗の説に齟齬もあるものなり。



改正の図もそのむかて見べ

須彌妙高山。中央に居〻八万由旬。其中心より量れば四方へ次に持雙山高廣。これに四方。持軸山二万。檐木山一万。善見山五千。馬耳山二千五百。象鼻山一千二百五十。尼民達羅山六百二十五由旬右の

七山七海と金の所成なり七金山云云金輪の地なるゆえに金輪圍山亦
平に下り。三百十二平由旬と云。間々の海第一六億万。第二八億
三八二万。第四五万。第五八五千。第六八二千五百。第七八一千二百五十。
悉くへ功徳の香水なる故。香水海と云。第八の海外に鹹水盈
満すと説り。外鹹海八三十二万二千由旬と云。以上須弥の中心より南
方の鉄圍に合る
六十万億百三十
七由旬



六百二十五由旬と定るとの〻。儒家の天文に地球九万里と云ふ〻。
世界ハ四ツの大洲あり。左地の形象圖の如く異なるハ。天の勢西北ハ満
東南に足ざるを見るゝ。日本かて云ハ。日輪北陸より行と記す。天度廣
且長し。南陸より行時ハ。天度狹日短し。天の満ざるにあらず。國土北ハ
偏也〻。赤道の下に當在國ハ。天ハ見と南北等。佛説ハ印度は
南贍部洲ハ属せりと云。支那日本。何洲ニ属せりと云佛説ハ氣
信ぜる意より。等く南贍部洲の中と称来る〻。儒家の天文ハ地
球の萬邦ハ五大洲ハ名ちり。日本唐土天竺。亜細亜大洲に属せ
國々とする如し。世俗の圖ハ鉄圍山ハ省。鹹海の形のまわり。四洲ハ
先南方ハ南贍部洲 ［　］ハ。其形扇面の如く圖。

傍に同じ。ハ久ハ細小に二ツ置せり。ハ属國幾許箇有る風土同ハ示せ
その〻北方に北瞿盧洲 西方に西瞿耶尼洲 東方に東弗婆提洲 を形
方為半月。天の勢ハ其理地ハ〻ハ。各傍ハ屬洲ハ
知べし。七層の山の間に水ハ書るハ。功德の香水海〻。左方に山の号。右
方に夫々の高さ。水ハ出る分量ハ記す 持雙山出水高四万由旬 須弥の絶頂忉利天
高さ八方に其半に 持軸山高二万由旬 持雙山四万の半に下る也 檐木山高一万由旬 檐木半ハ下る也
同一ハ下 善見山高五千由旬 馬耳山高二千五百由旬 象鼻山高千二百五
十由旬 尼泥達羅山高六百二十五由旬 其間の七海廣前の方に記如。
偖海より四万由旬の持雙山ハ。須弥の半覆かて是より一万由旬ハ
一層級とも〻ハ。二万ハ二層級 三万ハ三層級 四万ハ四層級かて 忉利天

り。諸神は手を拱く敬持の意なり。一層毎に十手と有。須弥
山の四層目より下へ三層目迄の間は四天王坐して守る。提頭頼吒
天王毘盧勒叉天王毘婁博叉天王毘沙門天王是へ宮居の形
四箇圖せるは其宮殿へ。右四天王は梵名なり。翻譯をもバ下の名
となる。持國天東方にあり。増長天南方にあり。廣目天西方にあり
多門天北方にあり。又其數は倍倍。傍山八千由旬の間は恒憍夜の
神。又其數を倍倍。傍山四千由旬の間は持髻叉の神。又其數は倍倍
傍山一万六千由旬の間は堅牢叉の神守護あり。凡二千由旬より。二万六
千由旬の處まで。合て三万由旬。四天王の持一万を加へ。四万由旬。持雙
山より忉利天の間へ。蘇迷盧山は梵語にて。三ヶ所は妙高と飜譯也。

後に此云妙高山とあり。此方の言ふ所と云義へ。出水は万由旬へ。亦然
海水より出るなり。出水も八万づゝ由旬へ。亦然と云。須弥のるさは八万。廣さも亦
八万とあり。支那の天文か
地球四形の半は北平規とも云るなり。万廣さ倍て十六万。水は八万。八万。
北平規の上にあるなり。八下一四る。須弥の流相所は通ずべし。絶頂は切利天
ふて。正中に宮殿大らかなるを長也。是帝釈天の居處ふて。儒家の天文の北辰
なり。居屋ふ小に宮の方並は四方へ天づ。三十二天の居へ。儒ふ紫微宜へ。
東西南北四ツの峯。是天上に山の峯あるふわゝゞ。高に成仮て峯と云
南は吹瑠璃峯北は黄金峯西は頗胝迦峯東は白銀峯是其方の色成
は石ぜへ。瑠璃は青。頗胝迦は水晶の梵語。透明の義ふて此ふは玉の用。
ふは黄に南は青く東は白西は紅に蘇迷盧の心と云。儒家也
東方青。西方白。南方赤。北方黑。中央黄色にて五行に配也。儒イ

の違く。四方の高峯。険絶頂かあるハ。今冬夜及の敬事るに因とのきく
金剛手とあり 西南善法堂 流出 此岩遠かに孝 東北圓生樹
四ハ自ら天の形象柔和忍辱の相く 人間百年月夜 壽一千歳 也
前かも云如く。北極地頭上に戴國土半年長に夜ある故發明也。
佛書に四洲の人の壽地説て。前の四洲の号に各誌如。天上世界に
北洲の壽地記。是又北極地頭上に見最北の地ある故知。須弥の
左方に日輪地号 輪径五十一由旬 とある。日の大なること八百十六里
一由旬八十六里 一里八六町 右方に月輪地号 輪径五十由旬 とある。月の径尺八百
里。但世俗の号に周圍五十由旬と有ハ謬。周圍ハ三倍の數とある。月
輪の左方に小輪地号 ハ星。日月より高く懸地知む 最小星

一俱盧舎其最大星十六由旬 也 衆星大小の分量地記 ゝ。俱舎
論世間品ハ日月ハ迷盧の半。日ハ五十一月ハ五十とあり。又最小星の径
一俱盧舎。最大星の径十六踰繕那とあり。踰繕那とハ由旬と云。
唐土の十二里。俱盧舎ハ二里に相當。一里ハ六町。一説に唐土の六町
を以て。日本の間尺に合せ。ハ四町三十六間餘ハ當。誠人疑。十六由旬は
二百五十里。是大星の径。小星の径二里に比。ハ。大小の差異ハ。
其。然に常径に流れ故て一定ハ。増一阿含経ハ大星ハ一由旬小
星ハ二百歩。樓炭経に大星ハ圍七百里。中星ハ四百八十里。小星ハ二
十里。瑜伽論ハ大ハ八十八拘盧舎。中ハ十拘盧舎。最小ハ
四拘盧舎とあり。日月星の分量。儒家の天文ハ比。ハ其分量

の説へ抑乾坤覆載の間ハ微妙不思議。古来より天文數術の後傑出て暦法ハ立末代ハ行んとすれども。毎々天に不審ハ差出て其法數百箇ハ用ゐ難し。時に從て法ハ更ると和漢相同。況ハ一行の算盤ハ提ハ此の大小ハ勘較せんハ。識者ハ笑ひ。又ハ誹る。諸星ハ諸天の宮宅報に依て感ぜる福力光現ぜと云。又いく忉利天高ハ萬由旬唐土の六十五万二千八百里ハ當日月去地四萬由旬是迷盧の半と説。四方へ唐土の三十二万六千四百里。幾由旬と云ハ。儒の天文ハ度數ハ用ひ里數ハ用ざる如し。大數とハ云て繁多ハ云へ。日月ハ七箇の海と山との總量二十三万八千百二十五由旬の外第八の鹹海三十二万二千由旬の海上ハ旋轉

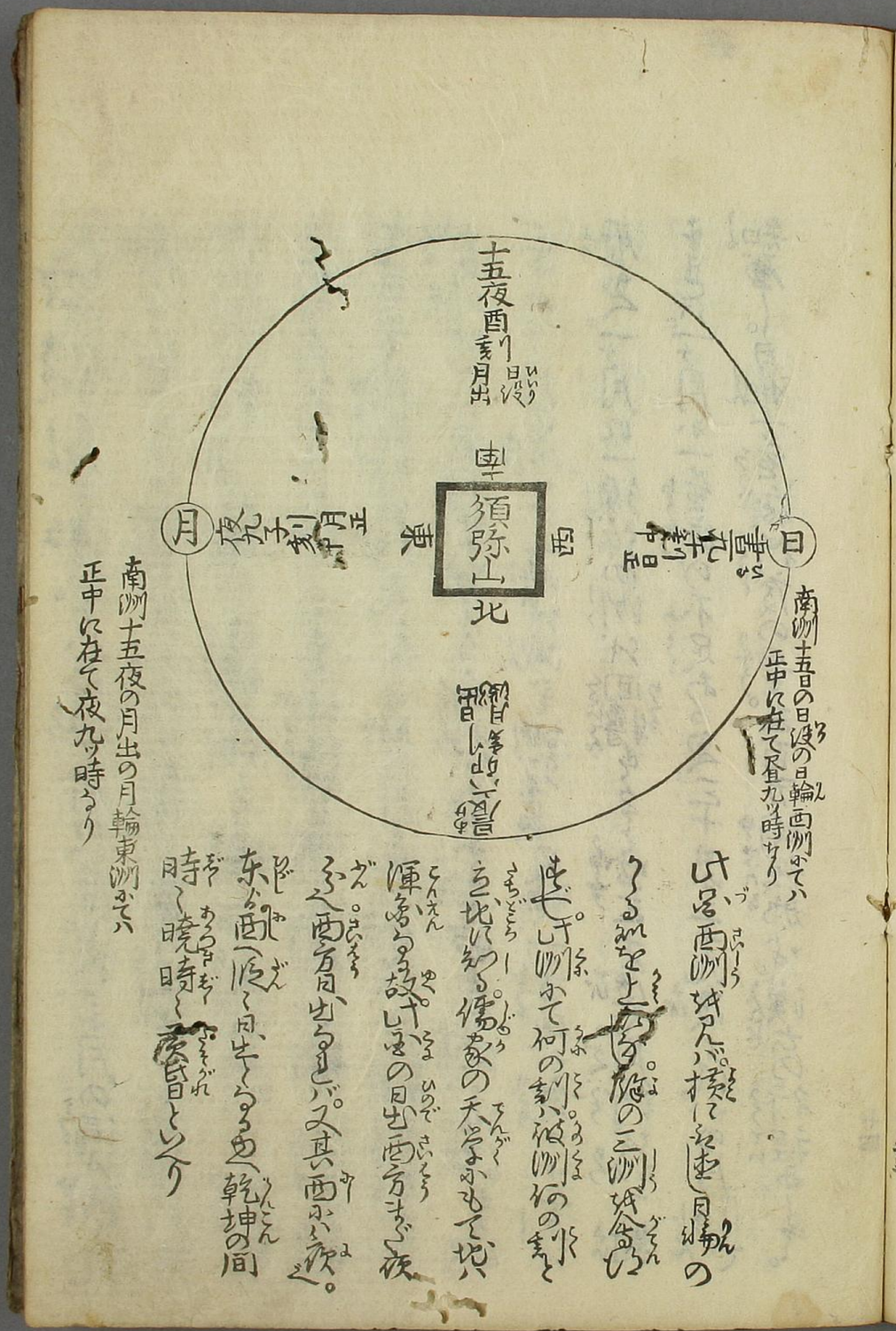
南洲ハ云へ。洲の南ハ行。西洲ハ洲の西ハ行。月一昼夜に三万由旬餘ハ行。日月行道の径一百万由旬。南洲ハ日月東より出。洲の南ハ経て西に没。西洲ハ南より出。洲の西ハ歴て北に没。北洲ハ西より出。洲の北ハ経て東に没。東洲ハ北より出。洲の東ハ歴て南に没。故に佛比丘に告ぐ。閻浮洲（南贍部の別名）の人の西方ハ瞿耶尼の人ハ以て東方とす。法苑珠林ハ三説。無東西可説。有南北とも説。儒の天文ハ。天ハ昼夜なく。東西ハ有形ハ。ろ石ぞとる。日月一昼夜に旋て三万由旬ハ。四千八百里（一里六町）ある。一時ハ間に四百万里ハ走。其數甚大と疑ふ人、あり。地球九万里ハ支那ハ云へ。是ハ人間の業に一周回せんと。假令

順風に帆を揚げて疾く飛ぶとも。四五年を経べし。況や
地に比ぶべ。廣大無量の天を行。唯一日一夜に九万里地を照し尽
すかと。惑を解べきなり。倶舎論に日月星宿何に依て住
風に依て住と謂諸の有情の業増上力を以て苦に風を起て。妙
高山を繞り。空の中に旋環。日等を運持して停ず墜ざらむ。
彼の所主此を去て四万踰繕那なりと有。風と梵語に毘嵐と云
毘蘭婆とも云。此に猛風と云。日月猛風に乗ずる。昼夜運転
して墜ずともあり。又涅槃會疏に五風に吹るゝ。自然に運旋ず
持風二に住風。三に動風。四に轉風。五に行風と云。儒の天文に九天
十天の説を儲。宗動天の運旋烈迅。一息の間断なし。諸天是に

帝せらるゝ。日月星辰斯日も亭主なるとする。宗動天の旋や。開闢
ろ一氣是を旋次と云に等。又鉄圍山と云ふの實に山にあらず。若に
有て象るに似に等。儒家の赤道環の類と知。其辺に毘嵐の餘風
あり。佛書に出るを以て知る。赤道に南北二極あり。九十一度余づゝ。天
を平分せり。筋に。最初に西に出て。警る様見合辨ず。又仏経に
日道一百八十有て主復と説り。是三百六十に一年の日數に称
ふ。節気南より東に向ひ。南方に夏。西方に秋。北方に冬。東方は
春。南方夜極て短時。北方に夜究て長。瑜伽論に日行時に遠
近あり。若藕遊盧に遠近時に寒暑と。近に時に熱と。又云鉄
圍の邊に毘蘭の餘風あり。日過ると速に。須弥の辺に毘蘭の餘

風の如く日行て緩くとなる
佛説の月宮殿行て日輪に近づく故に日輪の光に被侵照されて
餘辺に影を發す。自ら月輪を覆ふ此時圓満せざるなり。
日東より照せば西辺に影を發す故に餘辺と云。日の體は淨妙月の
體は稍麁なる也。月輪照されて自ら覆ふ其覆の濃の弱き遠き
人也。日なるときは樹の影を発する如し。照に多少不同なる也。覆も
亦多寡異なり。所以に欲と不定。日輪は速疾に月輪は遲緩行
度同じ。日光は赫奕として月明は微光。十六日より晦日に至ぬ。
日輪東にあり月輪西に在る十六日以後の月輪は西邊に影を發し
西方欽。朔日より十五日まで日輪西にあり月輪東に在る朔日以後の

月輪は東邊に影を発。西方に喩は行燈を以て炬火に對映時。
炬火の方は益光を以て對映せざる方は行燈に自ら影をせざるとき。
涅槃經に佛迦葉に告ぐ。譬ば人有て月の現ぜざる所に皆人月
沒して云て沒の相を作ども月の性実に沒せざるとき他方に現ず
也。彼行の衆生復月出ると謂り。月の性は実に出ることなし如し。
如何とする也。須弥の障を以ての故に現ぜず。其月は常に出て性に
出沒なしと云。譬の天文に天に至夜なりと云に為ん。譬は月は
一圓の清水に光を含て照。明に日月上下に長。日月
借る月の光は天の方に向ふ故。人は下地なる也。光を日月相離るに随て
漸く月光地の方に向。離れて遠て満月なる。望の後又相近づく也



此図西洲北方ハ接て北極月輪のるれをよ[illegible]。俗の三洲北方ハ北極山かて何の気ハ彼洲にのの水をと北にて知る。儒家の天をよかもて北ハ渾沌なる故北極の日出西方なり夜ハ西方に出るとハ其西方に夜。東方西に沒日出るを乾坤の間時〻暁時〻黄昏といふ

[illegible]ハ西辺光明暾[illegible]受る月ハ東方光と儒光[illegible]。佛ハ暗の沉[illegible]流。佛法の比丘に告のハく。若閻浮洲日の正中なる時。東洲弗婆提ハ日始て沒し。西洲瞿耶尼ハ日初て出。北洲鬱単越ハ瞿盧洲正に半夜に當る。若瞿耶尼洲日の正中なる時ハ閻浮洲ハ日始て沒し。鬱単越洲日の正中なる時ハ。瞿耶尼洲日初て沒。弗婆提洲日始て出。閻浮洲まさに夜半に當と云。又毎月十五夜ハ日沒と月出と同〻く酉刻。南洲酉刻なるとハ。東洲ハ子刻。北洲ハ卯刻。西洲ハ午刻。故に南洲十五日日沒の日輪ハ。西洲の正中に當 南洲ハ日沒 西洲ハ日中

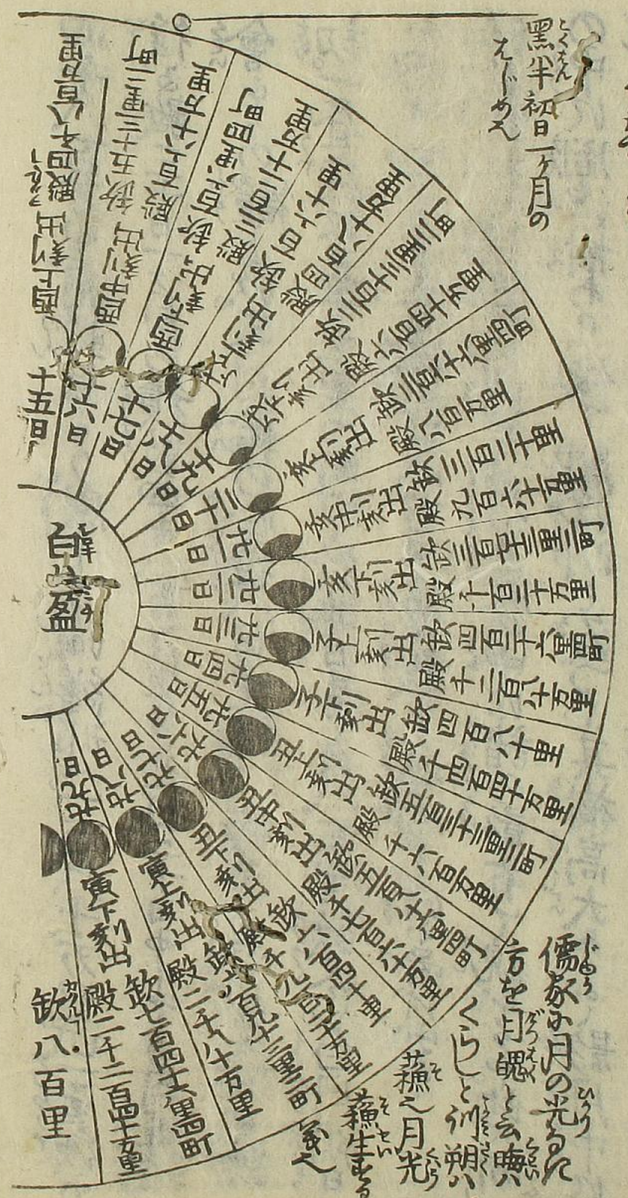
北洲ハ南洲十五夜月出の月輪ハ。東洲の正中にあり 南洲ハ月出 東洲ハ夜半 北洲ハ月沒

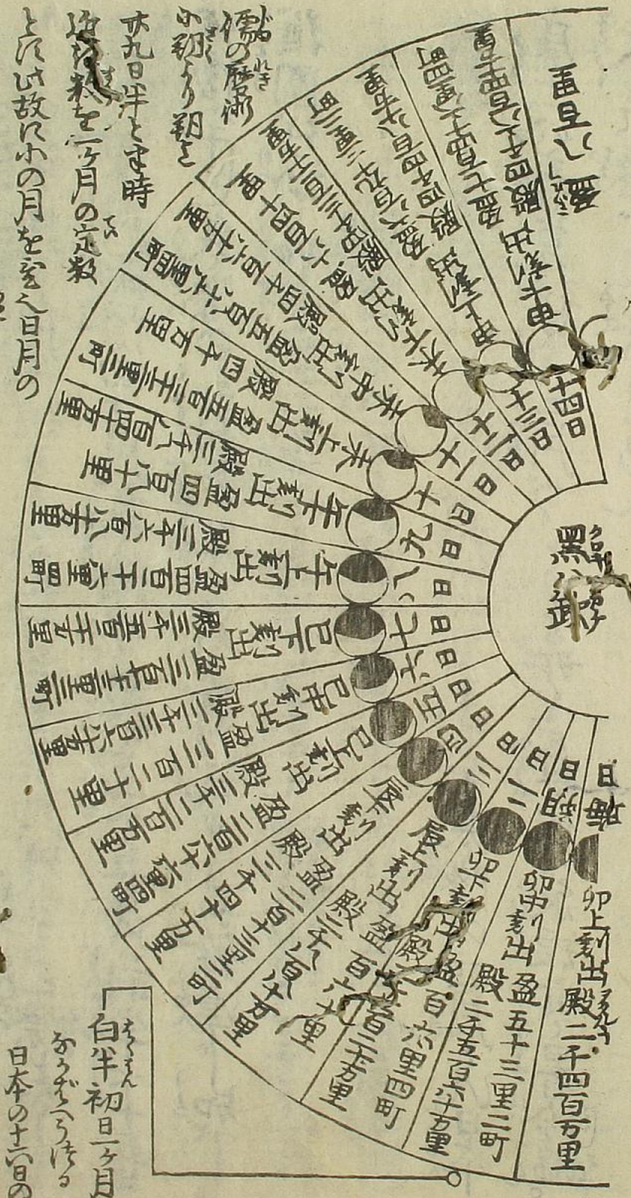
猶四洲日月出沒正中ハ[illegible]図[illegible]左に示す

天竺六日本支那と違ひ。十六日ゟ月の一日。十五日か月の満ゟ欠る。
是より前十五日ゟ白半又ハ白月と云。後十五日ゟ黒半と云黒月と云
日ゟ日ゟ前半月輪の一旋転。日輪より遅し。一昼夜毎に十万踰繕那
後半と云ふ。一ケ月三十日ゟ移る。三百万踰繕那日輪より殿く。日輪ハ一昼夜か定
て三百万踰繕那ゟ行也。三十日目に月と日と合ス。又月輪東方より
出る時ゟハ黒月十六日より白月十五日か迄。出る時ゟ漸く遅くなる故。
三十日一ケ月の間か十二時ゟ減ぞ則一昼夜日輪ハ一昼夜か定て十二支ゟ
歴也。一ケ月に一須弥四洲ゟ周遍ゟ也。三十度ゟ月行ゟ対
ゟ也。一ケ月か一昼夜の不足ある也。三十日か二十九度と云。小の月ハ遅
知る。日輪一昼夜行度の量。三百万踰繕那ゟ漢土の行程ゟ。

四千八百万里。月輪日より殿十万踰繕那ハ。一百六十万里。一昼夜か
後る数三十日一ケ月の積数四千八百万里ゟ也。三十日ゟ月再相
會ゟるの證と云。又月輪の全径八百里前ゟ黒月十六日ゟ欠
初。一昼夜に五十三里三町づゝ欠。晦日まぞに八百里欠尽。白月朔日
か明ゟ生ず。十五日満月か八百里盈数を示同じ次か晦ゟ出て
法苑珠林に復何の因縁ぞ。月宮殿の中に諸の影有て現ずる。此ゟ
の中に閻浮樹あり。依て閻浮洲と名づく。其樹高大ゆゑて影月中に
現ずとあるハ。月中桂の樹有と云ふ似ゟ。又別書に過去に兎有て菩薩
の行を行ぜ。天帝是ゟ試ん爲肉ゟ索て食んとのハ。身ゟ火中に捨。
身命の惜ぬ事ゟ示し。天帝感て焦ゟる兎ゟ取月の中に置て。

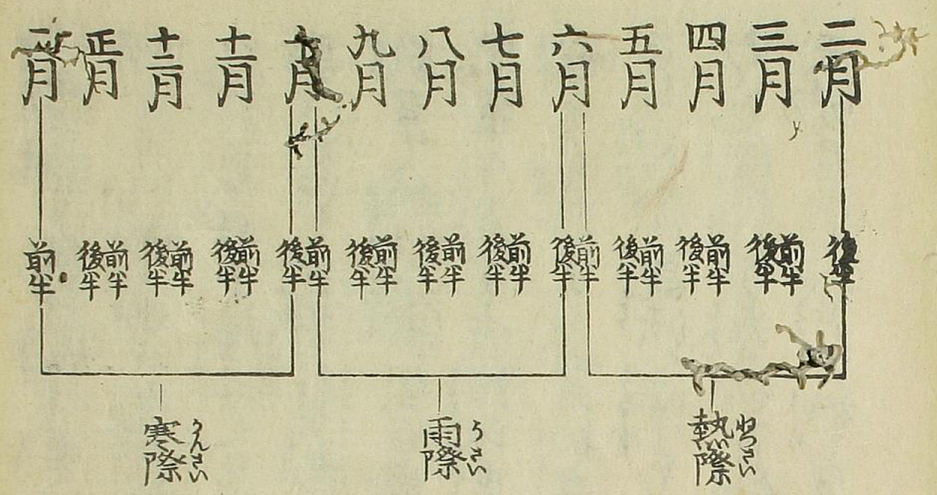
未来一切の衆生捨て。月城樂是城瞻。是過去の菩薩慈城行。身ずから城知むと。荒唐信ぜられ足ぬるとも。玉兎の撫仏說かも見る知むも





前ふも云如く。天竺の八月の十六日は其月の始と取め。十五満月過欲初る。初日。其日酉中麦ゞ月の出。月の初て欲數八五十三里二町。月の日ゝ殿

數八百六十万里と記す。夫より毎日の數を知る。日本中に識す。日本唐土の日次をかゝて。程を知易からしむ。天竺は朔日晦日なきと云て。黒半幾日白半何日とも。又一年十二ヶ月を分て三際とす。熱際四ヶ月雨際四ヶ月。寒際四ヶ月。上十五日を前半。下十五日を後半と。寒際の三月前半一日。正月元日。其餘準ず知べし。猶圖を以て知安からしむ。但し二月十六日より十五日を初日とすると六月十五日を。熱際の四月。六月十五日より十月十五日を。雨際の四月。十月十六日より二月十五日までを。寒際の四月と。日本唐土に春夏秋冬三月づつ。夫々に應じて立るなり。



上巳別せず。日本唐土の月次。天竺は何際幾月前半後半幾日と称す。月の落る。仏涅槃二月十五日。支那の称也。天竺は寒際四月目の前半後の日。誕生は熱際二月目前半一日。雨際二ヶ月目前半九日比。夜漸長く昼縮る。是は月九日比。天竺は熱際六月。六月より十月を毎日大雨降て雨際と云。十月を毎日大雨降て雨際と云。夕立雨の如。寒際は十月月前半九日比。夜や漸に昼漸短。是は二月九日比。十方の春分比。

経に依て日月の蝕を述んか。涅槃経かハ羅睺羅阿修羅王の手を以て日月を遮る。是を衆生蝕と謂り。日月の體實に欠て[illegible]と法華の註に羅睺とハ障持。日月を障持するとゝ是畜生の種かて身長八方四千由旬とあり。夫日月の交蝕。暦家か推歩もまゝ一定の數有て。既往未然數百歳も坐致べきものなるに。手を以て障碍。兒輩も肯べ[illegible]然印度の俗古より日月の蝕を[illegible]傳習来るゝ舊なり。世の知慮俗の傳れに従ひ。道に入[illegible]るとも[illegible]ち如來の説法に心を釈尊數を觀理を盡す此説を[illegible]て[illegible]じ。既に孔子春秋か日蝕を書[illegible]と三十六。古史の記も所か順。[illegible]変[illegible]て人君か敬言の[illegible]示數を推理を究て筆しのぶかわゝび

七

此を以て彼を知て[illegible]云り。又麟経の日食を。後世より推歩もるに。合ざるもの間あるゝ。好事議論なれ。或人以為此経に限て。経傳秦火の災わり。且亂世を経て傳來ると。千歳版木の磨滅書卷の蠹もわゝ。五の字か欠て三となり。三の字か二かも[illegible]。然を傳写一來んよか爭ふ誤るゝ。ふんと反覆して其魚魯を推考魯史の舊文か知ぬ。聖人の手筆聊誤るゝ[illegible]を發明。夫子の仰愈高し歎息せ。因に誌て同好に知しむと云

須彌山圖解 終

小引

須彌山圖解稿成。有客曰。凡學天文曆術者。棄支那之法數何更有道乎。子固崇璿曆者。而今演說浮圖之妄誕。竊所不冀也。對云。此舉意有償。書肆之需。而非急信之者。然子固守一隅。以爲震旦外無道。所謂膠柱者也。雖鳥雀不知鸞鳳之量。然請試論之。若夫伏羲之仰俯。軒岐之談。天虞舜之璿璣。呂氏之中星。邈乎遐焉。漢末乾象曆以降。名家數百。各當時之秀。而授時特冠千古者。蓋有萬法古疎今密之故然也。後世西洋學者利西泰龍華民等入明。明竟用彼法數。頒曆於天下。由斯觀此。支那之外。非更无道也明焉。釋氏之教。以勸善懲惡爲專。若今釈迦刻意於此。果有出西泰華民之右者也。客唯唯莞爾去。直誌以爲後序云。文化己巳夏至日高伴寛思明撰并書

昇蘭

高井蘭山先生著書　星運堂　江戸下谷御徒町　花屋久次郎

和漢年中時候童蒙辨　多年立春より日七刻余づゝ移りて移り行く候栄枯別海州訳

野馬臺詩國字抄　詩の句ごとに漢字を厚紙に和解十数枚を添へ和漢を併せ考へ易きを便とす

袖珍名乗字引　小冊　実名に用ひる字を集め畫数を以て一覧に紀源を知り呼名を定むべし　一冊

音訓國字格　二冊　いろはの本ひらがなに漢字を其まゝ庭書きにて其思ふまゝを書き

鼓暦合刻　一枚摺　閏の月数時の刻と暦日を考へ刻とのあらましを知る　近刻

和漢朗詠集國字抄　八冊　詩歌の清新を求めいろはを以て詩歌の解を

北斗夜時斗　一枚摺　小斗の量にて夜の時を知る又行時八方向を知る

算歳捷徑　小冊
同年齢年別に神武帝よりの年数紙ずれなくてあり

囲文錦字詩抄　唐土婦人の詩なり
詩の後に字ごとに一句〜に引くなり詳解す

早見六十圖　一枚摺
かぞへずして何歳か何の年のうまれ何性と知る数の記なり

平日重寶記　同
日どり吉凶さまざまの事をしるしあり

日土圭潮汐時　同
有来る創定しるし新く出る城廓し手そ〜ぎり行記ふせ

御藏米相場
扶持米俵直し早見　同
其年渡月米穀のお場早見
いろ〜出来

農家用文章　前編一冊　後編一冊
農家日用の字ぶて上三月往復の文通等平常人用の文辭品〜文例法前集

農家調寶記　前編一冊　後編近刻
地方産業年中時節衣食住書法道を農家人用のふこの外ふ

兒讀古狀揃講釋　一冊
字のおり仮名ふるとの文法ふ文さる法
改正　訂誤　小野篁歌字盡　三冊
篁の作歌より歌字まで云の
誤を改正俗字場補す　近刻

飡事蒭戒　二冊
儒者医者ふ取て人間養生
の道を述唐本を採脂肉古月の部り　近刻

菅家文章　一冊
世に菅公の文と云校正を加へかな付ふす
渡辺文盟先生門人河原氏書

須彌山圖解　一冊
須弥山の説分別をのべ
新に一ふ説釈を加へて解せり　近刻

人事人情字盡　二冊
喜怒哀楽の類人情を行作坐
仏の新人事人情を出て俗語遊　近刻

上洲妙義詣文章　大阪河原矢口詣文章　神祐俗文章　源氏名寄文章
年中夜叢文章　雑司谷詣文章　四季文章　藤堂詣文章
消息往来　女消息往来　十二月の新文章　小地　新撰四季懐花暦

宋元書畫錄

蔡書